
牢獄。

F

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

牢獄。

【Nコード】

N9884X

【作者名】

F

【あらすじ】

牢獄、といえば。それはもちろん、鉄格子と石の壁に囲まれた薄暗い場所をイメージするだろう。けれど、俺達の場合は違う。都内の地上13階、見晴らしのいいこのマンションの部屋。光に溢れたこの場所こそが、俺とユキの　　牢獄なのだ。

.....

初作品、更新は異常にノロいですwしかも携帯の仕様上5000

文字ずつ投稿です。ゆっくりじっくり熟成させていきたいと思いま
すのでよろしくお願ひします。

18禁的描写はありませんが性的描写はあります。そしてBLです。
おこな方はどうぞごゆっくり。

パートA - 1 (前書き)

パートA - 1。

冒頭と馴れ初めです。

シナップスはよく行く近場の店から名前を借りて……いや、パクツテ
マセンヨ？

パートA - 1

馴れ初め、と呼ぶには重すぎる。

初めに思い浮かんだそんな感想を、今、ここで、不意にもう一度思い浮かべた。

「 シュンさん」

優しく囁く甘い声。

俺の名を呼ぶ、女の子のような高い声。

「 ユキ」

返す俺をはにかんで受け、少年はそつと体を重ねる。細く美しい肢体が糸のように絡みつき、ふわりと香る薔薇が意識を急激に奪い去っていく。

申し訳ない気持ちになりながら、ユキの体に大きな手で触れた。骨と筋肉でゴツゴツしたそれを少年は嬉しそうに受け入れ、自ら秘部へ誘い込む。白くすべすべとした肌に這われただけで唇からエクスタシーの混じる吐息が漏れ出た。

「んっ あん」

その艶やかな音。恍惚とした表情。俺はそれに誘われるように動きを速めていく。

ユキのイイ所は全て知っている。ユキが嬉しいと思うことも、ユキが嫌うことも、ユキがしたいことも 全て知っている。

「 シュン、さん…ふあっ…」

ユキ。

俺の ユキ。

愛しくて仕方がない、俺のユキ。

少年が何故メイド服を着て俺のベッドの上で密事に興じているのか。その始まりを俺は、もう一度だけ思い出していた。

ユキと出会ったのは、大体一年前。俺はその時何の変哲もない大学生であり、ユキは何の変哲もない高校生だった。

…いや。

何の変哲もないわけではなかった。

正確に言えば、片や『ただの一企業の社長を務めている』大学生、片や『全国ボーカルグランプリ優勝候補の』高校生。それ以外には『何の変哲もない』2人だった。

一企業の社長になったのは色々ややこしい事情があるので割愛するが、とにかく俺はそこで実地経験を積むために働いていた。頂点に立つ者として把握しておかなければならないものは経済的な動きやライバル企業の集客策ばかりではなく、むしろ自社の底辺がどのような仕事をしているかの認識や客からの直の要望を聞くことだと思っていたからだ。

その仕事とは、受付。および、調理。

…俺は、とあるカラオケ店の社長なのだ。

そのカラオケ店は名を『シナップス』というのだが（パクリではないぞ！）、そこは5歳の子供連れ親子から学校帰りの生徒、ラッパースタイルの人間からお爺ちゃんお婆ちゃんまで 誰もが安心して集えるとそれなりに評判な店だった。機種も大手に対応して四種類は確保しており、来月には最新機種を導入してみようと思っている。

そしてこの店に集まる人々が誰彼問わず囁き頭を捻る噂がある。

『七色の天使達』が、いるらしい。

『七色の天使達』とは勿論本当に天使がいたというわけではない。それが意味するのは『七色の声を持ち、天使のような歌を響かせる

何者かがいる』ということだ。窓もドアも黒塗りにされ中が見えないようになっていいるスペシャルルーム。通常料金と一時間毎に百円を上乗せして払わなければならぬこの特殊な部屋。その中でも最も音質が良いとされる、シナップス二階最奥部に潜むX2-1号室。そこに何者かがいるらしい、と。

無駄に広く輝かしいホールのような受付や廊下ですれ違い様に話を聞く度に、俺は笑いたくなるのを必死にこらえた。客が噂するには『歌手の　さんと××さんがお忍びで来ているのかもしれない』とか『アイドルグループの　が練習しているに違いない』とか。違う、全くもって違う。

「よっこらせ」

「お、社長。お疲れさんですー」

「ああ。何か運んできたのか？」

「はい、N1-3にピザを六枚ほど。本当に子供ってよく食べますよねー」

「確かに。…まあ、叫ぶからな」

バイトで働いている学生の軽いノリにいつものように返答し、スタッフルームに入って監視カメラの映像をぼんやりと眺める。画質の悪い小さなテレビの中には様々な人間が映っているが、この時間には俺の視線はいつもある部屋に集中していた。

「社長はいつもの通りっすか？」

「おう。今日も『からあげ丼』と『牛乳』だよ。あ、今から観察タイムな」

「了解っすー。いやあ、しかし…可愛いっすよね、X2-1の子」

「ま、確かにな。だが葦原さんは男だぞ。間違っって口説いたりするなよ」

「あはは、それはないっすね！俺はお姉さんタイプにしか興味ないんでー！」

「…初耳なんだが」

X2-1号室では、たった一人の少年がもくもくと丼を抱え口を動

かしていた。小さな体に次々にからあげとご飯を流し込むような動きは見えていて清々しい。マニュアル通りに作ったとはいえ嬉しいものだ。

少年の名は葦原有希。葦原は17歳の男子高校生でありながらほぼ毎日この部屋に入り浸るカラオケ大好きっ子であり、見た目がどこからどう見ても美少女であるにも関わらず無愛想で無口な人間だ。2ヶ月前からずっとここを根城にして歌を歌い続けており、その容姿と歌の上手さ、意外な真面目さで従業員からは人気を博している。葦原は朝9時にやって来る俺を必ず待つており、開店時間が待てないから入れてほしいと毎日せがむのだ。11時開店なのに2時間も前からいる理由を聞いたがだんまりであり、代わりにいつも熱心な視線を投げかけてくる。その破壊力は通常の上目遣い女子の比ではない。無言だがイイ。ぐつと来るのだ。店に入れてやると自主的にX2-1号室から掃除を始め、店内清掃や機械整備を手伝う。お返しに小遣いをやるとちよつとだけ嬉しそうに笑ってくれるのがものすごく可愛かったのは内緒。

朝10時から従業員がちらほら集まり始める頃、葦原は必ず部屋で発声練習をしている。ここで最終的に声を出して、その日にどんな歌を歌うかを決めるらしい。一度覗いてみたらちよつとドアの真ん前に立っていたらしく、後ろからキツイ衝撃を与えてしまった。したら3日間ほど連続で朝は睨まれた。

そして開店時間。 X2-1号室に、天使が舞い降りる。

そう。天使の正体は、その少年。この葦原有希という高校生は類い希なる才を持ち、低音域から高音域まであらゆる曲を歌いこなすのだ。少年はたった一人で何人もの声を持ち、朝から晩まで歌いきり、平然とした顔で金を払って帰っていく。

そんな少年だったのだ。

「いつも思うんだが、葦原さん、学校はどうしてるんだらうな」

「あー、確かに。まあ少なくとも真面目に出てはいないのは丸分かりっすよね」

「…サボリ？」

「だと思えますねー…あ、食べ終わった」

井をぺろりと平らげた少年は次にジョッキを掴み、中にたつぷりと注がれている牛乳をぐびぐびと飲んでいく。ノンストップ、躊躇いなし、とにかく思いきり。勢いだけでジョッキを飲み干すその姿はかなり妖艶だ。何せ下手な女子より可愛い子が、眉を多少曲げてはいるが小さな唇で白濁液を飲み込んでいくのだ。おかげで自然と色つばい妄想を繰り広げてしまった。

食べ終わった二品は机に放置し、マイクを片手に立ち上がって伸びをしたり発声したり。そうして機械をちょんちょん弄り、音に合わせて歌い始める。その繰り返しだ。

「昼夜必ずからあげ井と牛乳食っててよく飽きないっすよねー。しかも太らない！羨ましいかぎりっす！」

「…あんなカロリーとってんのに細いままだかな。ちょっと心配だわ」

「社長はムキムキっすもんねー」

「いや俺は人並みだから！」

その日も朝から普通に出勤、普通に葦原さんを入店させ、普通に業務。厨房で作ったからあげ井と牛乳をトレイに乗せ部屋に運べば、待ち構えたようにソファに腰掛けた少年がいた。小休憩にと楽典を開き読んでいる。真剣な瞳だ。

「お待たせ致しました、からあげ井と牛乳です」

「ん…ありがとう」

目を上げた葦原さんはドキッとすくらしい美形だ。美少年…いや、美少女だといっても差し支えない。柔らかそうな頬は真白く雪のようで、かすかに朱がさしているのは歌唱による熱のせいだろうか。

潤む瞳はどこまでも黒く輝き、吸い込まれてしまいそうになる。髪はショートだが無造作に弄られており、絶妙なワイルドさがかえって女の子らしさを引き立ててしまっていた。

俺は井とジヨッキを置いていつもの通り部屋を出ようとして、ふと、
葦原さんがじつとこちらを見ていることに気づいた。

「……どうかしましたか？」

少年はしばらくこちらをじつと見つめ続けていたが、やがて小さく
ため息をついた。

「……何でいつも、あなたなの」

「あ、気づいてましたか？」

「……今、ふと思っただけ」

静かな口調にはツンデレ要素が少しだけ混じっていた気がした。黙
って笑顔で見つめていると「……やっぱり何でもない」と言っ
て井を抱える。何故だかよく分からないが俺もソファに座って葦原さん
を見つめ続けてしまった。

こうして見るとやはり可愛い。そして男とは思えない骨格を
している。細い指先はしなやかに長くも、井を支える手は小さい。腕
には筋肉はあまりついておらず、そのまま撫で肩へと視線が行く。
早春に合わせた白い長袖Tシャツはサイズが大きいものをわざとチ
ヨイスしたらしく、だぼだぼだが着心地は良さそうだ。首元から覗
く鎖骨がセクシーだと思ってしまった。

服のせいで胸は分からないが、この様子なら恐らく細いのだろう。
透明な机のおかげでジーンズを履いた脚が見える。内股だ。こちら
は使い古された物らしく所々に何故か絵の具がついていた。靴は普
通のスニーカーだが年季の入った感じが伺えた。

「……………」

そこまでじっくり観察していたら葦原さんはジト目を向けてきた。

「あ、いや、すみませぬ」

「あげないよ」

「……え？」

「これはぼくのだから。あげない」

そういつて井をギュッと抱える。その表情が強気ながらも一生懸命
で、俺は笑いをこらえることが出来なかった。一気に気持ちや和ん

でしまったのだ。

「ははっ…そんなつもりじゃないよ」

それでも頑なに井を抱えて訝しげな視線を送る少年。態度も容姿も可愛くて仕方がない。立ち上がり、ドアに手をかけ振り返る。まだ睨んでた。

「よし。葦原さんは常連だからな。そのからあげ井と牛乳は俺の奢りにしとくよ」

「えっ！…ホント？」

「俺は嘘ついたことないんだぜ」

「…あとで『お金無いから返せ』とか言わないよね？」

「ないない。つか俺は払わねえ。バイトの給料からちよっとだけ拝借してくるから。俺社長だし」

「…社長？」

首を傾げる動作があまりにテンプレすぎてやはり笑いをこらえられなかった。閉まる扉の隙間から少しだけ頬を膨らませた葦原さんが見えた。それだけだった。

その日を境に俺と有希は仲良くなっていった。仲良くなったとはいっても急に馴れ馴れしくなったりわけではなく、昼食や晩飯を運ぶと二言三言交わすようになり、直近の駅から出てくる俺を見たのか朝も店の前で待たずに駅から一緒に歩いてくるようになった。相変わらずあまり喋らず何を考えているのかよく分からないが、有希の纏う空気はそのままで心地よかった。ちなみに名前で呼んでも良かったのは、名字も『さん付け』も要らない、有希でいいと言われたからだ。少し驚いたが、理由は簡単。

「シユンさんが『さん付け』とか…普通の人より何倍も気持ち悪いから」

有希、もう少しオブラートに包んでくれ。

夏場を迎え、有希との出会いから半年ほど経過した。例年に比べて今年は梅雨前線が異常発達したらしく、7月のシナップスは何度も

大雨に見舞われた。客足が途絶えたり急増したりと忙しい中、有希はそれでも毎日俺と共に店に来ていた。従業員の中では新しく入ったバイトの学生に接客の難しさを体感させる役を受け持つてもらったことでさらに人気が増しており、新人のフロアマネジメントのお姉さんも気に入っている様子。俺としては文句なしだ。

雨に合わせて傘を持つ姿も変わらず小さくて可愛らしい。少しだけお喋りも得意になったらしく、俺が顔を向けると何か話し始める。始まりが「あのさ」なのが有希らしいが中身は意外にも政治や経済の話が多かった。勿論歌に関することも多かったが少し意外だった。「なあ、有希。気になってただけだよ」

「…?」

8月に入った朝、俺は前から気になっていたことを聞いてみた。明るい青空を目にしているというのに何故だかネガティブな気持ちになる。きつと聞いてはいけないと自ら思っていたんだろう。

「家とか学校…どうしてるんだ?」

「…」

急に空気が凍った気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9884x/>

牢獄。

2011年10月28日11時15分発行